

私の保育

—私の子どもたち—



大崎利恵子

長してきているのだと思ひます。

☆ ☆ ☆

この文章を書くに当たって、「私の保育」という題をいただきました。「私の保育はこれしかじか」というか、語れるようになりたい！私の願望です。ただ一年半の保育者としての生活の中で「前どちらがつたもの」というより、以前には気づくことのできなかつたものに、今、ほんの少しずつ気づいて、考えようとしていることがあるように思ひますので、断片的ではありますが、それらをここにしるしてみることにいたします。もし、どうしても題名がいるのなら「私の子どもたち」とでも言えればよいのかかもしれません。

私のクラスは四歳児、男子二十名、女子二十名計四十名になりました。昨年は一年園生活を送つた五歳児を途中から担任したので、今年集団生活は初めてという四歳児に出会つて本当に驚きと喜びと困惑の連続でした。一人一人いくつものエピソードをもち半年間、いろいろな出来事(?)を経て、今の状態まで成

わがクラスの最強のあばれん坊はT君です。ところが、ちょっとしかられたり、ころんだけがをしたり、注射の時等に泣きべそをかくのも、ます彼なのです。彼は、今までの家庭の生活どちらが幼稚園で遊ぶこととともに満足しています。活動力あふれる彼が、縦横無尽に保育室をとびまわる時、友だちにぶつかってしまふのなんかあたりまえだし、誰かが使つて遊んでいる物は、なおさらやつてみたいからとりあげてしまふし、机の上は乗るためにあるようなものです。そんな彼に、朝のあいさつからはじめて、人とのつきあい方を知らせていくのは大変でした。いまだに彼をみるとふるえてしまふ女の子がいっぱいです。でも、十月のある日、どろ粘土で製作をしていた時のことです。わりばしを利用し、植木鉢にお花をうえてみたり、うさぎやかめをしっかりと四つ足でたててみたりしていました。もちろん、だいぶ教師が手をか

した部分もありました。しかし、みんな自分の作品に満足していくつていました。T君も彼らしくどろ粘土をいっぱい使って大きなぞうを作りあげました。でき上がった作品をならべて、あれやこれや話をしていると、一匹のうさぎを見て

「あ、これ、とんでいる！」

と彼が言っています。前後に足を出して、おなかを地面にくつつけているうさぎで、私には、というより大人には、寝ていると見えるような形でした。彼の目にはごく自然にそのうさぎが生き生きとしてみえたのでしょうか。

また、動物園に行った時、つるのおりの中に魚がえさに与えてありました。なぜかその魚は頭としっぽだけでした。それを見た彼は

「かわいそうだね、頭としっぽしかないよ」

となげくのでした。もうたべられないと思っているのか、おいしいけがないのかをかわいそうと言っているのか、そこまではつかみとれませんでした。しかし、T君のその言葉は、何か、自分にはなくなつた感覚を知らせてくれました。ともすれば、彼の粗暴さのみに目が向かい、おとなしくさせることばかりに熱心になつてしまいがちな自分。でも彼がまるでわくにはまつていなかからこそ持つている新鮮な感じ方、私たちにはあたりまえにしか思わぬことにも驚き、大人は常識でしか考えないことを初めて考え、

どんな小さなことにも喜べる感覚というものを、毎日の保育の中で、どのように大切にしながらも、彼に行動のルールを教えればよいのでしょうか。私の言動は果たして目的にそつてているのかどうか、「Tちゃん！」などなつてしまつては、つくづくと頭をなやませている次第です。

新鮮な感覚、子どもの純粋な目をつぶしたくないという悩みをいちばん感じさせられるのは、なんと言つてもJ子に対してです。J子の天真爛漫さは言葉ではなくとも表現しきれず、かえって説明してつまらないものになつてしまふのがこわいくらいです。

おばけの話（「もりのおばけ」という絵本があり、それを利用して運動会の競技をしたので）をすると、もう、本当にこわがつて職員室に逃げてしまい、なかなかもどらないし、インフルエンザの予防注射は、あとで大きな注射をしなくてすむように、小さい方がいい人がするのよと話されると、かぜぎみだからJ子はしないことになっているのに、「私していく」と言いだし、素直そとれませんでした。しかし、T君のその言葉は、何か、自分にはのものというぐらいた話がまつすぐに通じていきます。それだからでしょか、物事によく気づきます。職員室の机の上に誕生会の花がおいてあると「これだれの？」ときく。主任のH先生はふざけて「もちろんぞう先生（主任先生の通称）のよ」そうするとたいていの子はだまされるのですが、J子は自分の誕生会の時に、H先生がいつしょだったのをちゃんと想いだし「うそだもん」と

やりかえします。またまたH先生が「先生はこんなに誕生日があるんだもの」と両手をひろげてみせると、J子はしばらく考えこんで、

「そんなに誕生日やつたら、頭がねずみ色になっちゃうよ」と反応。

これにはさすがのH先生も感心してしまったと私に話してくださいました。

私はその話をきいて、J子のその「切れ」におどろくより、J子とそうした会話をかわせることにあこがれてしまったのが本音です。自分の貧困さがいやになります。私など、せいぜいJ子に、ミルクをのんでいるとき「せんぶのむのよ、そうすると大きくなるからね」とやられて、にやにやしてしまうのが落ちです。彼女の何かに私がついていけないのかもしれません。ただ、問題はやっぱり、そういった天真爛漫さだけでは生活していくことはできないことです。こういった子に共通して言えることは、のろいということではないでしょうか。よく言えば、おつとりしていふとか、こだわらないとか、のんびりしているとかなのでしょうが、集団生活の中で、やはり、みんなとテンポがあわせられなくては困ると言ってしまいます。それは教師の都合から考えているのかもしません。

たとえば、ならぶ時など、J子はいつもビリで平氣です。他

の子が先をあらそとのを見て、腹だらしく思い、J子のようであつてほしいと思うことだつてあるのです。その反面、おべんとうのしたくの時など、みんなが待つてゐるのに、ちつとも急がず、ああだ、こうだと楽しんでやつてゐる彼女を見ると、こんどはおしこことが腹だらしくなつてきます。本当に手前勝手なのかもしれません。でも、やつぱり、遅くとも、うろうろしていても、どうぞ自由にというわけにはいかずに、楽しいことの反面に保育の悩みがつきまといます。

こうして、一人一人のことを考えていくと、心から一人一人の個性を大切にすることは、子どもを自由にしてあげられることなのかとおぼつかない思いをもちます。いつたい自由って何なのだろう。講義を聞いたり、本を読んだりすると、子どもが、子どもの自由を大切にしなくてはいけないという言葉によく出あいます。でも、これは言葉のニュアンスの問題なのかもしませんが、子どもの自由を大切にといふより、むしろ子どもは自由であり、いかに不自由をおしつけないかということなのではないでしょうか。ただし、ここでどうしても考えなくてはならないのは、自由ということの中味です。いわゆる自由保育といわれ、一齊保育といわれることが、自由と不自由でしょうか。子どもが自分のしたいことをすること、すなわち自由であり、一齊にさせること

は不自由であるから、自由を大切にすること＝自由遊びで
しょうか。誰に聞いても、そんなのはおかしいと言われると思
ますが、じやあ自由とは一体？ 最近、T君やJ子、その他の四
歳児たちを見ていて、私は私なりに自由ということをつかまえた
ような気がしています。（でもこれは二年目のとらえ方であり、
自身にもわからない無責任さです）

☆ ☆
自由と同じ言葉を使ってても、大人のもの自由と子どものもの自由
は違います。大人は、どこに住もうと、どんな職業をもとう
と、何を信条としようと、すべて自由なのが、今の日本社会で
す。しかし、子どもは親のもとに住まい、親のいつけにしたが
い、親の思う学校に行かされ、それこそ遊びまで、してはいけな
いことがあり何と不自由でしょ。行動という点では、大人は自
由であり、子どもはちつとも自由ではありません。しかし、大人
の自由とは、そういった表面的な点だけでしかないとも言えるの
ではないでしょうか。社会的地位とか常識とか、つきあいとか、
目に見えないものにしばられた大人は考へること、発想、心の状
態等々といった点では、まるっきり不自由であり、せいぜい、き
らいなやつの悪口を心の中でつぶやくぐらいなのです。それに
くらべた時の子どもたちの自由さといつたら、あのやわらかさ

は、石頭とはくらべのになりません。まさに子どもは自由で
す。

保育の中で大切にしなくてはいけないのは、そりだ心の状
態、心情の自由さ、発想の、考え方の自由といふものなのではな
いでしょうか。

では、どうすればそれができるのか。子どもたちが何をしてみ
てもよい、いつでも勝手にしていてもよいわけではないことぐら
いは私にもわかります。人間が社会で生きしていく上で知らなけれ
ばならない当然のルールといったようなものを、それを知らない
幼い子たちに教えていくには、どうしても行動面での規制が生
じてきます。社会生活を営む人間なら、してはいけないことはた
とえ子どもでもあるわけで、逆にそれがあることが、発想や心情
の自由をうばってはならないのだと思います。確かに、行動面で
の規制が強すぎることは、結果的に子どもたちの自由をも束縛す
ることになってしまいます。しかし、たとえ一斉保育の中でも、
一人一人が自由に考えられる場を作ろうとすることが大切なこ
はないでしょうか。そして、さらに、みんなといっしょにできな
いということは、一つの困った状態であり、いつしょの時にこ
そ、生き生きとのびのび活動してほしいとも思うのです。同じ場
所に集められ、同じ活動をさせられることの不自由さより、どん

の方が、子どもには不自由なのではないでしょうか。

それでは、子どもは何でも自由に発想できればよいのかと言われば当然「ノー」です。子どもがなぜ自由に考えられるかとおしゃはると一つには、結果を知らないからという面があると思います。つまり、次には、子どもたち自身、試してみる必要があるのではないかでしょか。そこで保育者は、子どもの発想を大切にする行為のさせ方というものを考えなくてはいけないと私は思うのです。どうすればその発想を生かした活動ができるのか、むずかしいとしか言えません。いつだったか例のT君がいつものよう遊びまわっていました。ペーパーサー用のたけの棒をみつけ、彼はさっそくK君と一緒にバラを始めました。今はもっぱらライダー」この格闘が中心で、昔のようにチャンバラははやっていない。それでも棒をみれば、やってみようと思うのは、T君にすればごく当然の思いつきだったのだと思います。私はさっそく、飛んでいて「目をつづついたり、耳をたたいたりしたらあぶないでしょ。だからこれはなし」と例のごとく禁止！ T君がやつたらただじやすまないし、実際、細い竹であぶなることは事実でした。

でも、理由がどんなにあったとしても、T君はやらせてもらえないかったことは事実でしょう。彼の活動は一つ小さくされてしまつたわけです。反省しました。そして、そこで気づかされたこと

は、新聞紙をまるめてわたし、「こっちでやってちょうだい」と言えばよかつたのではないかということです。彼の発想を大切に、彼の個性をのびのびとさせたいと思うのなら、そこで、いかに活動させたらいいのかと私は考えなくてはならなかつたのです。そしてこのことは結局、こうした保育をしたいと思うのではありませんでしょか。そこでこのことは結局、こうした保育をしたいと思うのではありませんでしょか。子どもが何を発想してらしくはいけないということでしょう。子どもが何を発想しているのか知れるだけ、子どもの気持ちになれなくてはいけないの

は、新聞紙をまるめてわたし、「こっちでやってちょうだい」と言っているけれど、できないという現実です。安全という名目のもとに禁止の連発をしてしまった自分は、結局、まだ保育を語れるようになることへのあこがれをもつていいだけの方がよいようです。それでも何でも、J子の天真爛漫さをみつめ、習い、T君ともみあい、子どもたちのがぎりない可能性の中で、一生懸命、自分がいやな人間にならないように（かつこいいことを言うだけ言って何もしないというような）努めたいと思っています。

(文京区立汐見幼稚園)